BC１世紀頃までの水稲稲作は縄文人によるもの、弥生時代の年代変更が必要

稲作のウイキペディアによりますと「紀元前 10 世紀または紀元前 5 世紀、紀元前 4 世紀頃（後述）に、大陸から北部九州へと水稲耕作技術を中心とした生活体系へ移行し、九州・四国・本州に広がった。

初期の水田は現在日本最古の水稲耕作遺跡となる佐賀県唐津市の菜畑遺跡の他、福岡県の板付遺跡、那珂遺跡群（福岡市博多区）、江辻遺跡群（糟屋郡粕屋町）、曲り田遺跡（糸島市）、野多目遺跡群（福岡市南区）などで水田遺跡や大陸系磨製石器、炭化米などの存在が北部九州地域に集中して発見されている。弥生時代のはじまりである。」とありますが、「弥生時代とは水稲稲作の開始から」という、あくまでも定義上の話であって、縄文式土器に炭化米が付着しているので、これらの**初期の稲作を縄文人が担い推進したというのが正しい**と考えています。

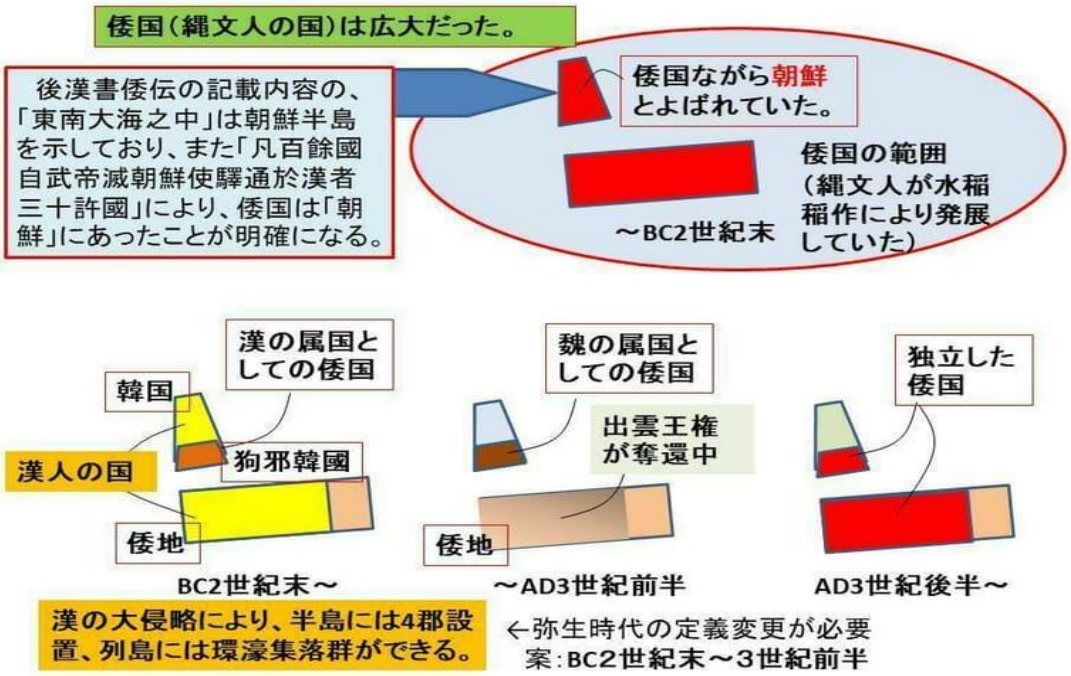
青森県の「砂沢遺跡」では、水田跡・縄文式土器・土偶などが同時に発見され、縄文人による水稲稲作が BC３世紀頃に行われていたことが判明しているので、**日本列島の稲作は、半島から縄文人がやってきて、地元の縄文人に教え、それが次々に日本国内に伝搬し、青森まで達したのではないかと考えられます。**

あちこちでの水稲稲作の BC1 世紀頃（＝BC2 世紀末：208 年の漢の武帝による大侵攻）までの履歴は、縄文人（倭人）によるものと考えて間違いないでしょう。

愛知の「朝日遺跡」や奈良の「唐古・鍵遺跡」では、「縄文人による水稲稲作の遺跡：～BC1 世紀」、「漢人の環濠集落の遺跡：BC1 世紀～AD3 世紀前半」、「邪馬台国＆出雲王権の連合支配の遺跡：3 世紀後半～」の 3 重構造になっていることがわかります。

後漢書東夷伝の冒頭の「倭在韓東南大海中　依山島為居　凡百餘國　自武帝滅朝鮮使驛通於漢者三十許國」＝「倭は韓東南大海の中に在り。山島に依り居をなす。およそ百余国。武帝、朝鮮を滅してより使駅漢に通ずるは三十許国。」により、以下の３つのことが明確になりました。

１．倭が半島内で、もともと 100 国あったが、漢の 4 郡設置によって、30 国に減ったこと。
２．「在韓東南大海中」の「南大海中」は半島を指している。
３．倭人がいたエリアで、漢が奪った（70 国分）エリアは朝鮮と呼ばれていが、その後朝鮮（エリア）は、韓に変わり、邪馬台国等のあった朝鮮南側の倭は狗邪韓國と呼ばれた。



BC2 世紀末（漢の大侵攻）まで、朝鮮半島に倭国（＝縄文人の国）が 100 国もあったということは、当然日本列島側も（朝鮮半島の縄文人の国々が足かせになって弥生人の侵入を簡単には許さない状況で）、水稲稲作によって人口爆発を起こした縄文人の国（あるいは国に近い形）があったと考えるのが自然です。

奈良県の中西遺跡のネット紹介記事内容、「弥生時代前期後半（約 2500～2400 年前）の水田跡が確認されていた奈良県御所（ごせ）市の中西遺跡で、新たに約 3500 平方メートルの水田跡がみつかった。県立橿原（かしはら）考古学研究所（橿考研）が発表した。水田跡は延べ約４万３千平方メートルに及び、これまでに確認された弥生前期の水田跡では全国最大規模とみられる。」は、BC２世紀末以前の話なので、縄文人による水稲稲作と考えられ、人口爆発が起こり、国または国に近い形が形成されていたと考えられます。

日本列島側の記録はありませんが、漢の大侵攻での半島への４郡設置のとき、同時に漢により、北九州と若狭湾からの大侵略があったと考えています。

漢の BC２世紀末の日本列島への侵略の結果、ほとんどの縄文人が殺害され、縄文人の水稲稲作のエリアが乗っ取とられ、それを拡大するような形だったがために、あたかも弥生人が水稲稲作を始めて、そして広めたたような、間違った感覚になってしまったと考えられます。

従いまして、いままで長い弥生時代があったと思っていた部分は、かなり限定され、**実質の弥生時代は、BC１～3 世紀前半なので、約 350 年間**ということになります。（水稲稲作の始まった年代ではなく）漢の侵略により、日本が支配された時代（BC１世紀～AD３世紀前半の約 350 年間）を弥生時代（＝銅鐸文化）と呼ぶようにすることを提案します。

漢の武帝の朝鮮半島 4 郡支配のとき、半島南側の、その後「狗邪韓國」と呼ばれたエリアでは、縄文人（倭人）は生き残り、漢の属国となることで、存続が許されたように、日本列島側でも、南九州や東北地方等では、存続が許されたようです。

鹿児島県の弥生文化の以下の紹介記事から推測できることとして、南九州には弥生人（漢人）はやってこなかったのでは？と考えられます。なぜなら、環濠集落や甕棺などの遺跡がないからです。また、DNA の分布でも鹿児島県は、縄文人の比率が非常に高いことが分かっています。

――――――――――――――（鹿児島県紹介ネット記事）――――――――――――――

「南九州でも，すでに縄文時代の終わり頃には米づくりが始まり，弥生時代前期には低地や丘陵周縁に集落遺跡が営まれる。しかし，中期以降もシラス台地上に立地する遺跡も多く，必ずしも水田での「米づくり」のみに依存しない南九州の弥生社会があった。

この時代，奄美・沖縄に産するイモガイやゴホウラなど南海産の貝は，貝輪などの装飾品として交易された。種子島の広田遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての 150 体以上の人骨に伴い，約 4 万点の多彩な貝製装飾品が出土している。」

――

邪馬台国（ヤマト政権：天皇家）は、半島でも、列島でも、縄文人の多くが殺され、土地を奪われ、生き残った縄文人は、北へ北へと生き延び、あるいは南へ南へと生き延び、(それで東北地方や鹿児島県では縄文人のＤＮＡの比率が高いと考えられますが)、3 世紀後半の九州征伐（吉野ケ里や平塚川添等）や近畿地方征伐の後、いち早く、東北や鹿児島県には、縄文人を救いに行ったので、4 世紀には会津や鹿児島に前方後円墳ができたのではないかと考えています。

以下に「唐古・鍵遺跡」のウイキペディアの抜粋をご紹介いたしますが、第一段階及び第二段階では、環濠は存在せず、縄文人によるものと考えられ、第三段階では環濠が生まれ、弥生人が縄文人を殺し、また残存した縄文人を締め出すために、環濠をめぐらせた可能性が高いとみています。

――――――――――「唐古・鍵遺跡」のウイキペディアの抜粋――――――――――

「第１段階：実質の縄文時代」

初期（弥生時代前期初頭から前半）には西地区から北地区の微高地に居住区などが存在したと考えられる。この頃は周辺に川が流れる中州状であったとされ、人工的な環濠があったとは考えられていない。この時期の土器は、弥生土器の古い型式と縄文土器の晩期の型式が共伴するが、縄文土器は周辺の集落との交易で持ち込まれたものと考えられる。また、多数の土坑とその内部から未完成の鍬や鋤などの木製品が検出されているが、これらは製作途中の木製品やその材料を水漬け保存したものと考えられており、集落は周辺集落に木器を供給する生産拠点でもあったと推定されている。

「第２段階：実質の縄文時代」

集落の第 2 段階（弥生時代前期後半から中期初頭）でも、引き続き未完成の木器貯蔵穴が検出され、農耕具や斧などの工具・高杯などの容器類が出土している。また、西地区からは流紋岩製石包丁とその原石や未完成品などが大量に発見されており、石包丁の製作工房があったと考えられる。流紋岩製石包丁は弥生時代前期に見られる農具で、材料は集落から直線距離にして 6 kmほどの耳成山から採取されたものとされる。このころには集落の範囲が南地区にも広がり、弥生時代前期末頃には各地区を区画する大溝が掘られた。この溝は湿地の排水を目的としたものと考えられ、短期間で埋没する。

各地区のなかでも西地区の集落が最も大きく、総柱の大型建物跡が検出されている。建物の全容は明らかではないが集落の中心的な建物と推定され、梁行 2 間（7m）桁行 5 間以上（11.4m 以上）の南北に長い建物で、独立棟持柱をもつ。柱穴には直径 60 cmのケヤキ 3 本とヤマグワ 1 本の柱が残存していたが、このケヤキの伐採時期は炭素年代測定法により紀元前 5 世紀ごろのものと、紀元前 4 世紀から 3 世紀のものという結果が示されている。このうち古い柱は転用された可能性があり、この建物の前身となったより古い大型建物が存在した可能性がある。

また、同時期の墓として北地区の北東はずれから木棺墓、南地区南東部から方形周溝墓が検出されている。木棺墓のうちひとつは保存状態がよく、頭骨を含む人骨が出土した。木棺の炭素年代測定では 2100 年前との結果が得られて弥生時代であることが確認されたが、一方で人骨を調査した馬場悠男が「とても弥生時代の人骨に見えず、江戸時代のものではないかと思った」と話すほど現代人に近い様相をもち、被葬者は大陸系の人物と考えられている。なお、木棺墓

と方形周溝墓の違いが時期によるものなのか、それとも埋葬形態の違いであるかは不明である。

「第 3 段階（実質の弥生時代）」
第 3 段階（弥生時代中期前葉）は、周囲に環濠が巡り、集落がもっとも繁栄した時期とされる。環濠の造成はいくつかの段階を踏んでいると考えられる。まず各地区を囲むような環濠が掘削されたが、すぐにこれは埋め戻された。続いて集落全体を取り囲むように幅 7m、深さ 1.5m から 2m 程度の大環濠が造成された。さらに大環濠の外側に 3 条から 5 条のやや小規模な環濠が掘削され、環濠帯を形成する。最も外側の環濠は、全長は 2 kmに達すると推定され、相当の年月と人工を必要とした土木工事とされる。環濠に湛える水は流水であったと考えられ、環濠集落の出入りは陸橋ではなく、木橋であったと推定される。集落の南東部にあたる環濠からは橋脚と思われる径 30 cmの柱が検出されている

＜まとめ＞
いままで、弥生時代と考えられていた時代は大きく縮小し、また「弥生人と縄文人とは仲良く共存していた」と考えるのは誤りで、土器がすっかり入れ替わり、弥生人が縄文人を殺戮し、次に、土器が大量に捨てられ、縄文人（邪馬台国と出雲王権）が弥生人を殺害してきた歴史がありました。

さらに天皇家（邪馬台国→ヤマト政権）は、戦前の教育では朝鮮半島説は否定（＊）されていましたが、（そして、その思想を誰も打ち破ることができずに今日まで続いておりますが）しかしながら、天皇家は、縄文人の総帥であり、漢（弥生人）に迫害されていた縄文人を救い、そして中国（漢）から、日本を奪い返し、そして好太王の碑にみられるように、天皇家は半島の奪われた土地の奪還も試みています。

注（＊）「伽耶は日本のルーツ」の著者の澤田さんは、日本統治時代の朝鮮では、日本による（天皇家ゆかりの）遺跡破壊が行われていたと書いています。

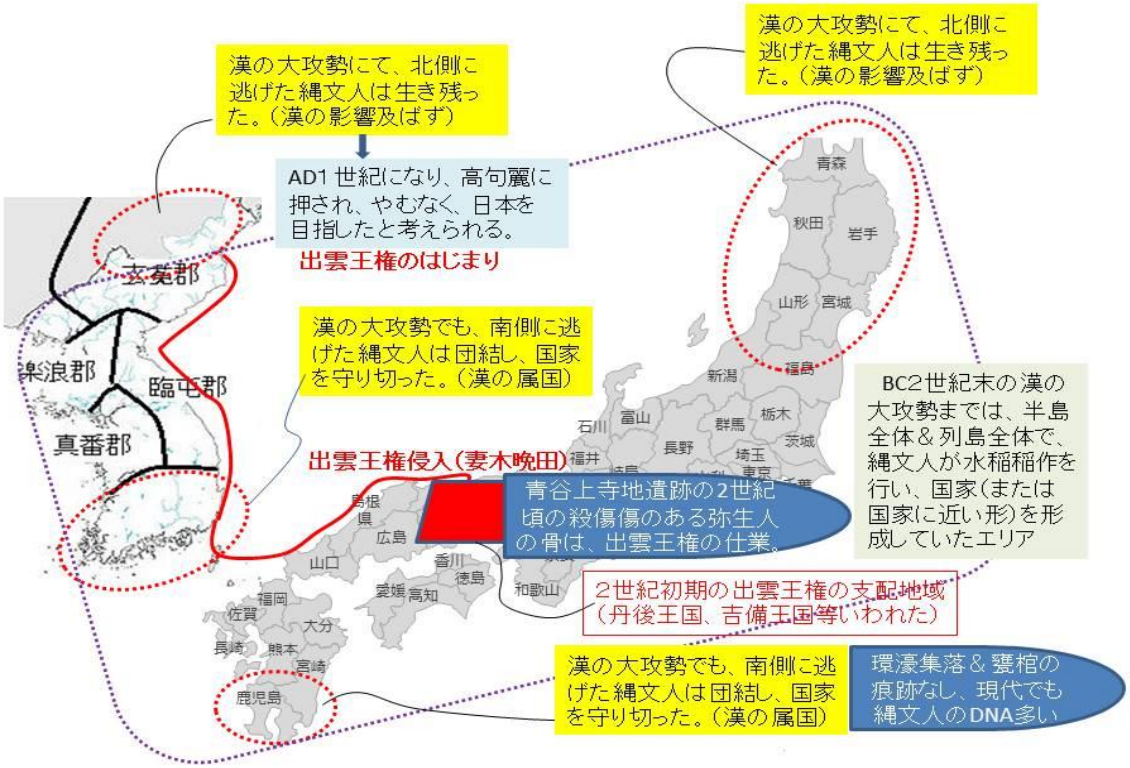
（以前は異なるとされた）韓国人と日本人の DNA は、最近の研究結果では、類似性が高く、ともに中国（支配）に苦しめられてきた経緯があり、もともとのルーツは縄文人（倭人）であり、天皇家を中心（象徴）として、まとまるべきであり、先の朝鮮併合は正しいもので、本来の縄文人の国家が一つにまとまった瞬間でした。だから、正しい歴史認識では返還の必要がなかったと言えます。

出雲王権の出現と邪馬台国（神武天皇）の日本奪還のプロセスについて

鳥取県むきばんだ史跡公園のホームページの中の「むきばんだムラの盛衰」を見ますと、「紀元前１世紀～紀元後１世紀前半」と「紀元後１世紀後半」とでは、ムラの中身が変わっています。

「紀元前１世紀～紀元後１世紀前半」の記載：『弥生時代前期から中期にかけて平地が中心であったムラの立地は、この時期から次第に丘陵上へと移り変わっていきます。　妻木晩田の丘陵では、松尾頭地区に数棟の竪穴住居をつくった小集団が住み始めることでムラの形成が始まります。』によって、縄文人がつくったムラは平地で、漢人（弥生人）が作ったムラは丘陵地帯が中心だということがわかります。

「紀元後１世紀後半」の記載」『妻木山地区や妻木新山地区まで居住域が広がります。また、居住域から離れた洞ノ原地区の海を望む丘陵上に、四隅突出型墳丘墓（よすみとっしゅつがたふんきゅうぼ）を主とする洞ノ原墳丘墓群（どうのはらふんきゅうぼぐん）や直径 65 メートルの範囲を囲む環壕（かんごう）がつくられます。この時期、環壕に囲まれた範囲には竪穴住居や高床倉庫は建てられていません。』から、出雲王権が１世紀後半には支配したことがわかります。



出雲王権は、BC２世紀末の漢の朝鮮半島進軍（４郡設置）のときに、北側に逃げた縄文人の集団で、１世紀半ば頃には、今度は高句麗に追われ、妻木晩田にやってきたと考えています。（方墳文化：蘇我氏等）

「青谷上寺地遺跡」の「集落中心域の東側からは約 5,300 点、人数にして 100 人分以上の人骨が見つかっており、2 世紀頃のものです。このうち 110 点、少なくとも 10 人分に相当する人骨には殺傷痕があり」から言えることとして、妻木晩田に陣取った出雲王権によって、青谷上寺地の弥生人の村が襲撃されたとみて、間違いないでしょう。

その後、高地性環濠集落をあちこちに作り、北九州にも攻め込んできたものの、吉野ケ里環濠集落や平塚川添環濠集落等も鉄壁な守りで、攻めあぐねていたことが、平原古墳（方墳）から祇園山古墳（方墳）の半世紀のタイムラグでわかります。

結局、吉野ケ里環濠集落や平塚川添環濠集落の攻略には、邪馬台国（神武天皇）に援軍を依頼し、邪馬台国が攻略（大量の土器が捨てられ、皆殺しだった可能性が高い）して、決着したのではないか？（各環濠集落の跡地には、方墳ではなく、前方後円墳が設置されている）

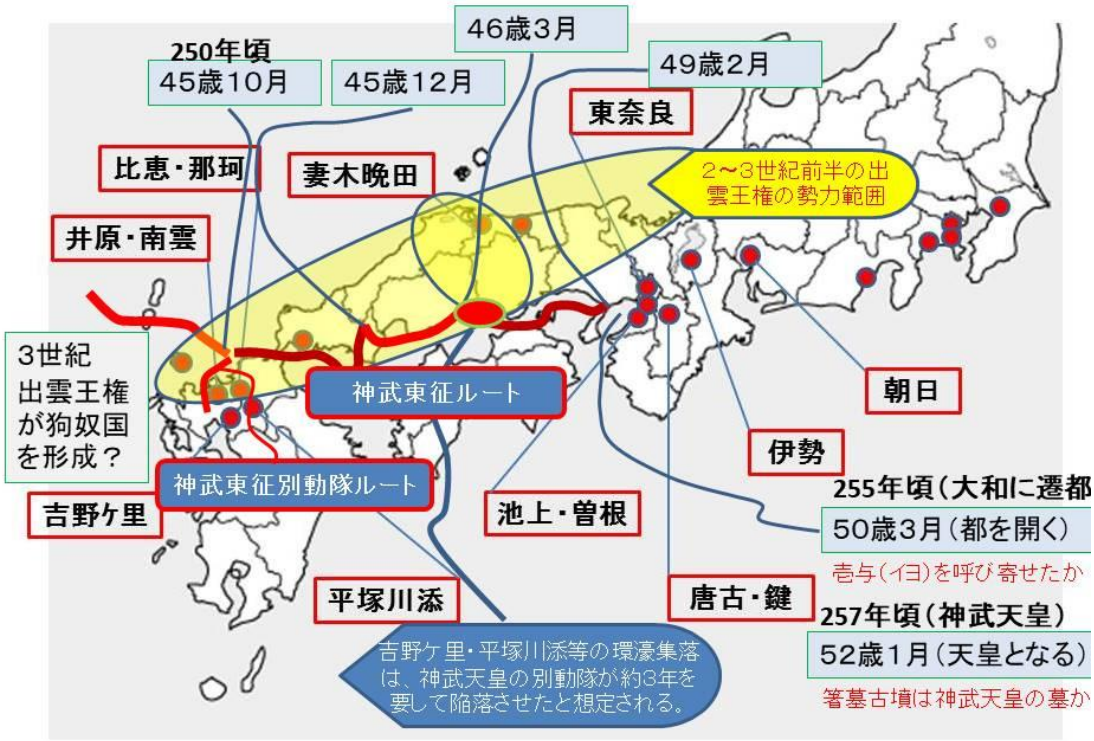
その後の出雲王権は、いわゆる「丹波王国」や「吉備王国」などの言葉が存在することとも関連し、鳥取・島根、岡山・兵庫あたりを席巻したものの、北九州や近畿は漢の環濠集落の大勢力に、攻めあぐねていたものと考えています。

なぜなら、近畿地方での 3 世紀までの方墳は見当たらず、北九州では平原古墳（2 世紀末）～祇園山古墳（3 世紀半ば）まで、50 年ほどのタイムラグがあり、その間ずっと、吉野ケ里や平塚川添環濠集落側と戦っていたことが想定されるからです。

それで、（縄文人の）仲間の邪馬台国に援軍を要請し、主に邪馬台国が北九州の征伐を行なったと考えられますが、平定まで約 3 年かかったのはないかと考えています。

なぜなら、神武天皇が吉備で 3 年間を過ごしたことが、日本書紀で書かれており、九州征伐隊が任務を終えて吉備に合流するのを（安全なところ＝出雲王権の本拠地で）待っていたと考えられるからです。

このとき、出雲王権の「方墳」と邪馬台国の「円墳」との共同統治の証として、前方後円墳のアイデアが話し合われたと考えています。



弥生時代の主な集落分布図

（「弥生ミュージアムHP」「常設展示図録（伊都国歴史博物館）」等を参考に作成）　by 青松光晴

その後、邪馬台国は日本全国の漢人（環濠集落）を駆逐するために、アクションするものの、日本平定後の 3 世紀末頃には伽耶に陣取り、半島での失地回復に乗り出したと考えていますが、日本側を任されたのが、出雲王権の蘇我氏と天皇家の側近の物部氏（円墳文化）だったと考えています。

蘇我氏は方墳文化をもち、邪馬台国（大和朝廷）の家臣としては、（公僕として）前方後円墳をつくり、（私的には）相続的な感じでは、方墳を作ったのではないかと考えています。

崇峻天皇を殺したり、天皇家（邪馬台国）を凌駕した蘇我馬子の墓は、石舞台と言われていますが、箸墓古墳（前方後円墳：神武天皇の墓と考えられる）にも匹敵する、300m 級の方墳であった（中大兄皇子等によって破壊されたか？）と考えています。

尚、半島にある前方後円墳は、（高句麗に攻め込まれそうな）百済が大和政権の権威を借用するために、あえて作ったとする説が有力だと考えています。

（補足資料）

魏志倭人伝を正確に読むと、また、陳寿の距離感（洛陽～遼東までが４千里）を踏襲すれば、魏志倭人伝での倭国は狗邪韓國（７千里）であり、その後神武天皇によって獲得された近畿地方（万２千里）となります。

日本平定後の天皇家が、３世紀末頃に伽耶に行った（半島の失地回復のため）証拠として、好太王の碑文の記載「高句麗軍は倭軍を追い、伽耶に迫った」という内容があり、伽耶が倭国の重要拠点であることがわかります。

伽耶には、大型円墳群があり、ネット情報で「オーストリアのウィーン大学（Universität Wien）で行われた研究によって、伽耶の古墳において、日本人に特徴的な縄文人の DNA を多く持つ人々が埋葬されていたことが判明しました。」があり、天皇家が伽耶にいたことは、ほぼ間違いないと考えられます。

他にも、日本書紀に記載されている、応神天皇の項に「九月　高麗人・百済人・任那人・新羅人が　そろって来朝しました　そこで　武内宿禰に命じて　この韓人を率いて池を造らせました。これを韓人池（からひとのいけ）といいます。」という内容があり、たかが池をつくるくらいで、わざわざ海外から人を呼び寄せることは考えづらく、陸続きの伽耶に天皇家がいたので、周りの国から人足を集めたと考えるのが妥当です。